

岩瀬大地

Daichi IWASE

タイとインドネシアデザインに見るモノづくりの
特徴について

本稿は、2022年度後期より筆者が取得予定の特別研修(タイとインドネシアにおけるサステナブルデザイン活動の現状についての調査)に先立ち実施した予備調査をまとめたものである。歴史的に日本のデザイナーやデザイン研究者、デザインジャーナリズムの関心は、自国の日本以外では主に欧米等グローバルノースのデザインに向けられており、アジアやアフリカ、南米等、グローバルサウスのデザインに関心が向けられることはなかった。本稿では、筆者に縁とゆかりのあるタイとインドネシアのデザインを中心に現状を分析する。持続可能な社会の実現に向けたサステナビリティのためのデザインに関する研究は、エコデザインや製品サービスシステムデザイン(Product-Service System Design)等、グローバルノースを中心に行われ、現代文明社会の持続性は技術的問題として捉えられてきた。

更なる経済・技術発展によって環境問題を解決し、持続可能な社会を実現しようとするエコロジー的近代化言説にもとづく技術中心主義的持続可能性(technocentric sustainability)の考え方は、根本的には現在の持続不可能な帝国型生活様式やそれを支える世界システムそのものは変えないまま、技術革新による環境効率や資源生産性の向上や消費者の行動変容によって、「成長の限界」及び「地球の限界」プラネタリーバウンダリーを乗り越えていこうとする。一方でこのような技術革新に頼った方法は、地球環境の状況や社会的公正を悪化させる懸念要因も潜んでいる。グローバルノースは、グリーン技術に身をもって環境配慮型の製品やサービスのデザインの普及が、持続可能な社会の実現に向けた唯一の解決策として捉えているが、持続可能な社会の実現には、根本的には技術革新のデザインではなく、それぞれの地域の自然や歴史に根ざした文化、生活様式の固有性を生かしながら、資本主義システムに過度に依存し過ぎない、独自の文化や自立した社会を作っていく、社会文化を革新するデザインがより重要であるとし、それを文化的特異性と多様性を豊富に持ちながら、経済発展を続けるアジアのデザインから学ぼうとするサステナブルデザイン国際会議での問題提起は、グローバルノースを中心に展開されてきた議論から見ると革新的であった。しかし残念ながら、アジア型のサステナビリティのためのデザインとはどんなものなのか、問題提起の後で議論が深まったとはいえ、また問題提起から新たな研究が展開されていった

わけではなかった。

従って特別研修では、タイやインドネシアのデザインの現場を訪問し、それぞれの社会的文脈の中でどのようなデザインを行い、どのような経済的、社会的、環境的变化を地域に生み出し、どのような持続可能な社会文化を創造しようとしているのか、総合的に研究していく計画であるが、本稿ではこれに先立ち、タイとインドネシアにおいて現在どのようなものづくりが行われているのか、各国におけるデザイン賞を受賞したデザインを分析し、ものづくりの特徴について議論する。

1. はじめに

本稿は、2022年度後期より筆者が取得予定の特別研修(研究テーマはタイとインドネシアのデザイン活動におけるサステナビリティについての調査)に先立ち実施した予備調査をまとめたものである。歴史的に日本のデザイナーやデザイン研究者、デザインジャーナリズムの主な関心は、自国以外では欧米等、グローバルノースのデザインに向けられており、アジアやアフリカ、南米等、グローバルサウスのデザインには、民芸やフェアトレードの文脈以外に、特に関心が向けられることはなかった。しかし近年タイをはじめ、インド、シンガポール、トルコ、インドネシア等、各国政府が公益財団法人日本デザイン振興会(JDP)と連携し、それぞれの国でのデザイン振興制度を設立¹してきたおかげで、少しずつ日本でもグローバルサウスのデザインを目にする機会が増えてきた。2009年には、タイのBiodegradable Packaging for Environment社のバイオ・パッケージがグッドデザインのサステナブルデザイン賞を獲得した。2010年には、東京ミッドタウン・デザインハブでタイのデザイン・エクセレンス賞(Design Excellent Award / DE mark)を受賞したデザインを紹介する『微笑みの国、タイのデザイン展』が開催された。また2018年には、東南アジア10ヶ国からアセアンセレクションとして応募のあった37のデザインに対して、22のデザインにグッドデザイン賞が授与された。筆者の友人で、本学のスペダギ・バンブーバイク・プロジェクトの授業²で連携しているインドネシアのデザイナー、シンギー・スシロ・カルトノ氏のスペダギ・バンブーバイクのデザインに関しては、グッドデザイン賞金賞を受賞する快挙を成し遂げ、グローバルサウスのデザインの存在感が高まってきている。

本稿では特別研修に先立ち、今まで目にする機会が少なかったアジアのデザインが勢いを増す中、広大なアジアの中でも一つの共同体としてまとまりのある東南アジア、その中でも特に筆者に縁とゆかりのあるタイとインドネシアのデザインを中心に現状を分析する。特別研修及び本予備調査でタイとインドネシアを含むアジアに着目する理由は、

『持続可能な社会の概念は、これまで主として欧米各国の経済的先進国を中心に議論され、組

み上げられてきた。そのため『すでに持てる国』の論理が『いまだ持たざる国』の思惑に先行する形で、現代文明の持続性に関する枠組みが形作られてきた。しかし、経済活動がいかにグローバルな広がりを見せようとも、地域や歴史に根ざした文化と暮らしの固有性は残り、価値観の多様性が失うことはないのではないか。特に、欧米諸国とは一線を画した文化的特異性と多様性を豊富に持ちながら、急速な経済発展を続けるアジア諸国は、必ずしも欧米流のサステナビリティの枠には収まらないダイナミズムを持っており、このエネルギーを温存したままでアジア型のサステナブルな社会を築くことができるなら、それは、これからの文明の発展の在り方のオルタナティブなモデルになりえるのではないか』

という、筆者も実行委員会委員として携わり、2012年にタイ・バンコクにあるランシット大学で開催された第7回サステナブルデザイン国際会議(テーマはアジア・サステナビリティ)³で問題提起された『持続可能な社会の実現における社会的文化的視点の重要性』が本研究の問題意識の根底にある(サステナブルデザイン国際会議, 2012)。

東南アジアが位置する熱帯地域は、地球の物質やエネルギー循環等、地球の持続性に関して中心的な役割を担っているにも関わらず、長い間、温帯地域にある欧米や日本を含むグローバルノースが、環境技術開発や持続可能な社会実現に向けた制度構築(例えば、サーキュラーエコノミー)を主導してきた。そして持続可能な社会の実現に向けたサステナブルデザインに関する研究は、エコデザインや製品サービスシステムデザイン(Product-Service System Design)等、グローバルノースを中心に行われ、現代文明社会の持続性は技術的問題として捉えられてきた。先進国に見られる、このような経済・技術の更なる発展によって環境問題を解決し、持続可能な社会を実現しようとするエコロジック近代化言説にもとづく技術中心主義的持続可能性(technocentric sustainability)の考え方は、根本的には現在の持続不可能な帝国型生活様式⁴やそれを支える世界システムそのものは変えないまま、どうにか人類が直面する『成長の限界』及び『プラネタリーバウンダリー地球の限界』を乗り越えていこうとする試みを生む。例えば、エネルギー資源枯渇問題に対して原子力やメタンハイ

ドレード、食料問題に対してバイオテクノロジー、気候変動に対して電気自動車や再生可能エネルギー技術、ネガティブ・エミッション・テクノロジーが挙げられる。これらは、現状維持をしながら、技術革新による環境効率や資源生産性の向上、消費者の行動変容によって解決を目指す試みである。つまり生産と消費を定常化させるような『抜本的な改革』ではなく、拡大する生産と消費を技術によってグリーン化する等『末梢的な改善』によって、経済成長に起因する環境的・社会的危機を乗り越えようとするのである。

しかし、一方でこのような技術革新に頼った方法には、更なる経済成長や人口増加による効果の相殺等、解決に限界があるだけでなく、地球環境の状況や社会的公正を更に悪化させる懸念要因が潜んでいる。例えば、二酸化炭素を排出しない原子力は、何世代に渡る放射性廃棄物の取り扱いやその費用の問題を発生させ、遺伝子組み換え作物の栽培は、途上国の土壤汚染や農家の健康被害や貧困問題を生み、電気自動車は、リチウムバッテリーに使用されるレアメタル採取が途上国の採取地域で引き起こす自然環境破壊や資源を巡る紛争、人権侵害、バッテリー製造工程や電力供給する発電所での二酸化炭素排出問題を生み、再生可能エネルギーは、太陽光パネルや風力発電装置製造に伴う更なる資源採掘問題を生み、ネガティブ・エミッション・テクノロジーは、広大な土地確保による地域住人の強制移住や自然環境破壊を生み、環境配慮型製品の生産・消費増加は、環境負荷を総体的に増大させる。

それにも関わらずグローバルノースはお構なしに、このようなグローバルノース産のグリーン技術に身にまとった環境配慮型の製品やサービスのデザインとサーキュラーエコノミーなどの制度パッケージの普及こそが、持続可能な社会の実現に向けた唯一の解決策としてグローバルサウスへの押し売りに勤しんでいる。持続可能な社会を作っていくには、根本的には技術革新のデザインではなく、それぞれの地域の自然や歴史に根ざした文化、生活様式の固有性を生かしながら、資本主義システムに過度に依存し過ぎない（もしくは全く依存しない）、独自の文化や自立した社会を作っていく必要がある。そしてそのためには、社会文化を革新するデザインがより重要であるとし、それを文化的特異性と多様性を豊富に持ちながら、経済発展を続けるアジアのモノづくりから学ぼう

とするサステナブルデザイン国際会議での問題提起は、グローバルノースを中心に展開されてきた議論から見ると非常に革新的であった。しかし残念ながら、アジア型のサステナブルなモノづくりとはどんなものなのか、問題提起の後で議論が深まったとはいえ、また問題提起から新たな研究が展開されていったわけではなかった。

特別研修では、タイやインドネシアのデザイナーたちの現場を訪問し、それぞれの社会的文脈の中でどのようなデザイン活動を行い、どのような経済的、社会的、環境的変化を地域に生み出し、どのような社会文化を創造しようとしているのか、サステナビリティやSDGsとの関連において総合的に研究していくことを目的としているが、本稿ではこれに先立ち、タイとインドネシアにおいて現在どのようなモノづくりが行われているのか、各国におけるデザイン賞を受賞したデザインを分析し、モノづくりの特徴について議論する。

2. データ収集について

タイのデザインについては、デザイン・エクセレンス賞 (Design Excellent Award / DE mark) を中心に、当該ウェブサイト⁵にアーカイブ化されている受賞デザイン情報やメーカーのホームページに掲載されている製品情報を二次データとして使用した。インドネシアのデザインについては、グッドデザイン・インドネシア賞を中心に、インドネシア商業省から発行されている2019年度受賞デザインに関する文書 (Ministry of Trade, 2019) やJDPが運営管理しているグッドデザイン賞のアーカイブ⁶、JETROに掲載されているグッドデザイン賞を受賞したデザイン情報、各メーカーのホームページに掲載されている製品情報を二次データとして使用した。グッドデザイン・インドネシア賞は設立してまだ日が浅く、アーカイブや英語による情報発信の体制が確立されていないため、インドネシア語でのデータ収集は難航した。二次データが充分でないサンプルやホテルやレストラン等の建築や空間デザイン、フォントやグラフィックデザイン、アイデンティティデザイン、デジタルメディア等、平面デザインは分析対象から外した。また、すべての年度のデータを収集すると膨大な量となるため、デザイン・エクセレンス賞は2018年度～2020年度、グッドデザイン・インド

ネシア賞は2018年度～2019年度に絞って収集した。

3. データ分析について

上記の方法で収集した二次データをもとに、各受賞デザインを材料の加工手段の度合いと生産方法による分類を行い、ものづくりの特徴の分析を試みた。人は自然界に存在する鉱物資源や化石資源、生物資源から原材料を取り出す。このような資源は加工され、各種材料が作られる。木村 at. al. (1991)によると各種材料は、加工手段の度合いによって①原材料 ②形を有する材料 ③成形される材料 ④成形された材料 ⑤複合された材料等、5つのレベルに階層化することができる。鉱物資源から取り出された原材料は、天然金属、砂、土、石等がある。化石資源から取り出された原材料は、石油、石炭、天然ガス等がある。生物資源から取り出された原材料は、動物や原木を含む植物がある。動物や植物から加工されて作られた皮革や天然繊維、木材は、それぞれ原材料から作られた形を有する材料である。プラスチックや合成ゴム、ガラス、金属、セラミック等の素材は、原材料から成形される材料であり、パルプは木材から成形される材料である。木質材料(例えば合板、集成材等)は、木材から成形された素材であり、合成繊維はプラスチックから、紙はパルプから、レーヨン繊維はビスコースから成形された素材である。FRP等の素材は、単独の素材であるプラスチックや繊維を複合させて作った素材である。原材料に近いほど加工度は低く、複合された材料に近いほど加工度は高くなる。またこれらの材料を加工して作られる製品の生産方法は、大きく分けて手仕事による生産方法と機械による生産方法に分けられる。手仕事による生産方法は、生産過程で道具や単純な工作機械を使用する場合もあるが、人の手による仕事が製品生産の要となっており、扱う材料も単純に組み合わせて制作される。一方、機械による生産方法は、機械によって製品を画一的に大量生産し、扱う材料も複雑に組み合わせられ、人は機械に従属的な存在として位置付けられる。

4. タイデザインについて

4.1. デザイン・エクセレンス賞について

『デザイン・エクセレンス賞(図1)』は、2008年に公益財団法人日本デザイン振興会(JDP)の支援のもと商務省輸出振興局(DEP)⁷によって創設され、製品・サービスをデザインによって強化することでタイの産業育成と活性化、タイ製品の国際競争力強化し、輸出拡大を目指している。JDPとDEPは、『グッドデザイン賞』と『デザイン・エクセレンス賞』の連携協定を締結し、デザインエクセレンス賞への審査委員の派遣、同賞受賞デザインのグッドデザイン賞での一次審査の免除、両国で受賞展示会を開催する等、両国でのそれぞれの受賞デザインのプロモーションに取り組んでいる。



図1 デザイン・エクセレンス賞のマーク(DEマーク)

デザイン・エクセレンス賞を受賞したデザインに与えられるDEマーク(ディーマーク)は、タイ語で発音するとDī māk(とても良い)という意味を持つ言葉の発音に似ており、デザイン・エクセレンス賞とグッドデザイン賞の深いつながりが感じられる。またDEマークの渦巻型のデザインは、タイ数字の1(Neung)をモチーフとしており、一番(優秀・エクセレンス)という意味がマークのデザインに込められている。デザイン・エクセレンス賞の応募カテゴリーは、①家具 ②贈答品や装飾品、生活用品 ③ファッション・アパレル、皮革製品、ジュエリー、テキスタイル等のファッション製品 ④家電やデジタル機器、オフィス機器等の工業製品 ⑤パッケージデザイン ⑥フォントやグラフィックデザイン、デジタルメディア、アイデンティティデザイン ⑦ホテルやレストラン、小売店、コンドミニアム等の建築やインテリアデザインの7つの領域に分けられ、2008年から2021年3月現在までに892点のデザインがデザイン・エクセレンス賞を受賞している。

デザイン・エクセレンス賞の審査プロセスは、大きく二つの段階に分けられている。第一段階は、応募者から提出された書類をもとに、書類審査を実施し、合格したデザインは第二段階へ進むこと

ができる。第二段階は、二つのステップで構成された現物審査が実施される。第一ステップでは、審査委員がデザインの基本コンセプトを審査し投票を行う。半分以上の審査委員から票を獲得した

デザインは、第二ステップへ進むことができる。第二ステップでは、表1に示されている審査基準に従って採点が行われる。

表1：デザイン・エクセレンス賞審査基準

審査基準	審査のポイント
デザインストーリー (20点)	デザインコンセプト デザインのマーケット戦略 文化的・伝統的価値を持っている
デザインの独創性 (20点)	創造的である 目新しい 革新的である 新しいテクノロジーもしくは新しい素材を使用している
情緒・美観 (20点)	美観 ライフスタイルの質を高めている
ユーザーへの影響 (20点)	有用性 便利 / 快適に簡単に使用できる 消費者のニーズを満たしている 安全性 ユニバーサルデザイン ユーザーの創造的思考を刺激している
社会と環境への影響 (20点)	ロングライフ / 耐久性 社会的責任を果たしている 環境に配慮している

参照：デザイン・エクセレンス賞ウェブサイト (<https://demarkaward.net/en/award>) より
(筆者翻訳)

4.2. タイデザインの分析結果について

DEマーク受賞デザインの分析結果を表2に示す。分析対象となった103の受賞デザインの内68のデザイン (66%)が『手仕事による生産』で、35のデザイン (34%)が『機械による生産』であった。

『手仕事による生産』の中で35%の受賞デザインは、バンブーやホテイアオイ、籐、オーク、天然繊維等の植物や革等の動物から採取される原材料から作られた『形を有する材料』を使用していた。上記の植物由来の自然素材は、タイに豊富に自生している再生可能な資源である。またホテイアオイに関しては、繁殖力が強く、運河や河川、ダムの水門を堰き止めたり、船の航行を妨げたり、観光地のビーチを汚染したり、害草としてタイで社会問題となっている自然素材である。続いて28%の受賞デザインは、陶器に使われる土や紙に使われる桑やサトウキビ、ジュエリーに使われる真

鍮等の素材は、タイに豊富にある原材料から『成形される材料』を使用していた。続いて25%の受賞デザインは、PETボトルのリサイクルやポリプロピレン、合成繊維、合板等の『成形された材料』を使用していた。これらの材料は、タイ国内で生産されたり、廃棄物収集過程で分別収集される人工素材である。そして12%の受賞デザインは、タイに豊富にある鉱物資源から取り出された土や生物資源から取り出されたヤシの葉、大豆、草、もみ、とうもろこし、天然石等の『原材料』を使用していた。

一方『機械による生産』の中で45%の受賞デザインは、生分解性プラスチックや合成樹脂、天然ゴム等『成形される材料』を使用していた。生分解性プラスチックや天然ゴムはタイ国内で採取される自然素材から生産される。続いて23%の受賞デザインは、PETボトルのリサイクルやポリプロピレン、リサイクル紙等『成形された材料』を使

表2：タイデザインの分析結果

	原材料	形を有する材料	成形される材料	成形された材料	複合された材料
手仕事による生産	<ul style="list-style-type: none"> •Clay From Home (土を焼いた園芸用ポット) •Pet smile eco self test (もみととうもろこしの穂軸でできたペット用トイレ砂) •Srisangdao Rice (もみ殻をリサイクルしたパッケージ) •Shell (ヤシの葉のトレイ) •Aroma candle (大豆のキャンドル) •Palm seed charcoal (アブラヤシの炭) •RAVIPA Reminder (天然石を使ったお守り) •Sweepy Grass broom (草の箒) 	<ul style="list-style-type: none"> •GEM (バンブーで編んだ吊りランプ) •HMONG: Shoulder Bag & Coat (自然繊維で編まれたバックとコート) •Amataa (リサイクルした革のバック) •SAUTER Cozy Chair Rattan (籐で編んだ椅子) •San Pad collection (リサイクルデニムとセメントバックで編んだバック) •Loom chair (ホテイアオイ等天然繊維で編んだ椅子) •Sexy dining chair (綿の紐で編んだ椅子) •Walee (壊れたアカシアを寄せ集めたベンチ) •Petite rattan stool (籐で編んだスツール) •Oversize hilltribe bag (天然繊維でできたバック) •Mawata hilltribe Bumble Jacket (天然繊維でできたジャケット) •Beam chair (オークの椅子) •Carpenter Table & Bench (チークの家具) •Sitsaad (い草のスツール) •Bend (木のコーヒーメーカー) •Jaak coffee table (タイ南部の木のコーヒーテーブル) •Mae Fah Luang s/s18 (天然素材の服) •Krok Sak (ココナッツの木の鉢と棒) •(w)hole chair (オーク材の椅子) •Water weed (ホテイアオイ等天然繊維で編んだ椅子) •Wit tray (バンブーとリサイクル金属のトレイ) •Blue Nails (天然藍染のジャケット) •Krachap hanging chair (バンブーの吊り椅子) •Northern lights design by DYE DEE (手織デニムの服) •Bend (木のコーヒーメーカー) 	<ul style="list-style-type: none"> •Jarn-Deaw (磁器) •Zero (陶器) •Mulberry x Peaberry (桑紙のパッケージ) •Chuenjai by Mitr Phol Hydrating Sugar Body Care Gift set (サトウキビからできたパッケージ) •Grajang (ジュエリー) •Air teacup (セラドンの陶器) •Peg (真鍮のペン) •Secret message ring (ジュエリー) •Paapaow (海洋ブラをリサイクルしたバック) •Weave (ジュエリー) •Husk (マカデミアナッツの灰を使った陶器) •Pa Sinh stacking rings (ジュエリー) •The dawn (アクリルのクラッチバック) •Sticky rice steamed (もち米用陶器) •Kratib (磁器のスツール) •Kram collection (磁器) •Sim steel bar stool (スチールとチークのスツール) •Recycat (リサイクルしたガラスで作ったメガネ) •Khing Side Table (真鍮のサイドテーブル) 	<ul style="list-style-type: none"> •PA-YAP (PETをリサイクルした服) •INNOVA Fabric Mask (PETをリサイクルしたマスク) •Ternary Dining Chair (チークをPPで編んだ椅子) •Arkha (籐をPPで編んだ椅子) •Supha Bee Farm Premium Honey (ハニカムコアをクッション材として使ったパッケージ) •Zequenz (ノート) •Shopchamuch Picnic Basket (PPで編んだパッケージ) •Klong Side Table (PPで編んだサイドテーブル) •Fire hose bag (消火栓のホースでできたバック) •Mellow (合成繊維で編んだソファ) •Bloomink (紙のジュエリー) •Turn to (C) (紙からできた花受け) •Rope weven lamp shade (ワックスコードで編んだランプシェード) •Artwork sumii (PETをリサイクルしたバック) •I bag U (ナイロンのエコバック) •Wideside collection (帆布のバックパック) •Bender (合板のサングラス) 	

	原材料	形を有する材料	成形される材料	成形された材料	複合された材料
機械による生産	<ul style="list-style-type: none"> •Husk (もみ殻をリサイクルした入れ物) •Vento brick (素焼きのブロック建材) 	<ul style="list-style-type: none"> •Bio Bua (キャッサバからできた食器) •Year ring (檜の皿) 	<ul style="list-style-type: none"> •Rubber Bag (天然ゴムのバック) •Nex-Plus (湯沸かし器) •Senity Elderly Toothbrush & Gripp (植物由来の生分解性プラスチックの歯ブラシ) •Seat Tech (自動車用座席スライド) •The elements (ワイングラス) •New Heng Kee Take-Away Set (自然素材でできたパッケージ) •ARMA inhaler (アルミ合金のハーブ吸引器) •Ray planter (リサイクルPEのプランター) •Picolo (スチール製のピクニックテーブル) •Silver spoon(ABS樹脂の高齢者用スプーン) •Lucky Mouse Rice Scoop (ABS樹脂の軽量スプーン) •Xposh(真鍮の蛇口) •KUCHE (ステンレスの蛇口) •Sugarcane Lunch box for all ages (生分解性プラスチックの容器) •Playground for all (ウレタンのおもちゃ) •Ambiente (リサイクルガラスのタイル) 	<ul style="list-style-type: none"> •Urban Rug (PETをリサイクルしたラグ) •AAMU (PPで編んだマット) •More (人工皮革でできた椅子) •Coco thumb (ココナッツジュースの紙パッケージ) •Durian paper bag (ドリアン用のリサイクル紙でできたバック) •61 WILLY 30 MFF (合板のトイレのパーション) •Oasis Round Pot S&L (リサイクルPPのプランター) •Colour Bloom Scent Diffuser (紙のディフューザー) 	<ul style="list-style-type: none"> •Ozone air (オゾン脱臭器) •Smart counter (LED水耕栽培器) •Smart Agar wood Incense Burner (電子香炉) •Nasket (家庭用グッシュボード) •La'mour Bed (ハイドロマッサージベッド) •Air lumba enlight (クッション) •DOS WaterPac Pro (飲料水用タンク)

用していた。そして20%の受賞デザインは、複合された材料を使い工場で大量生産された電化製品や自動車用品等の工業製品であった。6%の受賞デザインは、タイに豊富にある鉱物資源から取り出された土や生物資源から取り出された粉等『原材料』を使用していた。また残りの6%の受賞デザインはキャッサバやヒノキ等『形を有する材料』を使用していた。キャッサバは、タイに豊富

に作られている農作物である。

受賞デザインから見えるタイデザインの特徴として、三つ挙げられる。一つ目は、国内に豊富に自生する多種多様な自然資源や農業の生産工程で生まれる農産物残渣をリサイクルした素材を生かして、手工芸的な生産方法と組み合わせて家具や生活用品、ファッション製品等、生活に必要な工業製品を労働集約・手工芸的に生産している点で

ある。特に労働集約的に生産している点に関しては、タイの場合、織物づくり、家具づくり、食品生産等、資本集約型に変換することは地域の雇用がなくなることにつながるため、あえて資本集約型に変換しない事例をよく見かける。二つ目は、環境保全やサーキュラーエコノミーを意識したデザインに取り組んでおり、製品に使用する素材の選択や生産工程で発生する環境負荷を考慮しているエコプロダクツが主流である点である。環境に配慮したエコデザインが当たり前であるというエコデザイン後発国の強みを生かしているといえる。そして最後は、主に小規模事業者が主体となって製品を生産している点である。地域に根付いた小規模事業者が主体となることで、労働集約型の製品生産となり雇用の創出だけでなく、地域ごとの伝統文化や自然環境の保全に配慮した製品となる。

5. インドネシアデザイン

5.1. グッドデザイン・インドネシア賞について

『グッドデザイン・インドネシア賞(図2)』は、2017年にJDPの支援のもとインドネシア商業省輸出振興局(DGNED)によって創設された。同賞は、インドネシアの産業界に対して付加価値を生むデザインの重要性やその理解の促進、豊かな天然資源や製造業の発達を背景にデザインによるインドネシア製品の輸出振興・国際競争力強化や国際的デザイン賞への入り口になることを目指している。デザインによる付加価値のある製品を輸出拡大す



図2 グッドデザイン・インドネシア賞のマーク

表3: グッドデザイン・インドネシア賞審査基準

審査基準	審査のポイント
グッドデザインの基本的要素	機能 形態 アイデア 商業性 革新性
社会的に相応しい製品開発	人間らしさ 新しさ 美しさ 規範・倫理に従っている ビジョン
品質の熟考	多世代に向けた製品構成 工業デザインの品質 競争力のある製品価値を提供している ローカル及び輸出市場への潜在性 ライフスタイルの質を高めている
創造的なエコシステムの開発	より良い体験を提供している デザインによる解決策の質が高い ビジネスを促進する
インドネシア製品のポジティブなイメージ	インドネシア産業のイメージ向上に貢献している インドネシアデザインのイメージ向上に貢献している

参照: グッドデザイン・インドネシア賞ウェブサイト (<http://iddc.kemendag.go.id/gdi/>) より
(筆者翻訳)

ることによって、天然ガスや石油等、化石燃料には頼らない製品で輸出拡大と国際競争力を強化していこうとするインドネシア政府の意図が背景にある(JETRO, 2020)。タイのDEPと同様に、JDPとDGNEDは、『グッドデザイン賞』と『グッドデザイン・インドネシア賞』の連携協定を締結し、グッドデザイン・インドネシア賞への審査委員の派遣、同賞受賞デザインのグッドデザイン賞での一次審査の免除、両国で受賞展示会を開催する等、両国でのそれぞれの受賞デザインのプロモーションに取り組んでいる。

グッドデザイン・インドネシア賞の応募カテゴリ⁸⁾は、①アクセサリ、着用できる身の回り品(靴、時計、サングラス等) ②ヘルスケア・衛生用品 ③文房具、玩具、教育・子ども用品 ④スポーツ用品、レジャー・アウトドア用品、オーディオ機器、楽器 ⑤台所用品、調理機器 ⑥家庭用家具、生活用品 ⑦家電機器 ⑧ビデオ・カメラ用品 ⑨情報通信機器 ⑩医療機器、製造設備 ⑪住宅設備 ⑫公共空間、オフィス機器 ⑬モビリティ ⑭個人住宅や小規模建築 ⑮中大規模建築 ⑯インテリアデザイン ⑰公共施設、ランドスケープ ⑱メディア、コンテンツ、パッケージ ⑲システム、サービス、ビジネスモデル ⑳プロジェクト、活動の20の領域に分けられ、2017年から2021年3月現在までに108点のデザインがグッドデザイン・インドネシア賞を受賞している。応募条件として大きく2つ条件があり、一つ目の条件はインドネシアで(1)『デザインされている』(2)『売られている』(3)『生産されている』の3つの要件の内2つ満たしている必要がある。二つ目の条件は、量産されているクラフト製品もしくは工業製品のどれかに該当している必要がある。

グッドデザイン・インドネシア賞の審査プロセスは、大きく三つの段階に分けられている。第一段階は、応募者から提出された書類をもとに、書類審査を実施し、合格したデザインは第二段階へ進むことができる。第二段階では、現物審査が実施され、表3に示されている審査基準に従って採点が行われる。第三段階では、第二段階で選ばれたグッドデザインの中から、ベスト20、ベスト3、グッドデザイン・インドネシア賞大賞、オンライン投票によるPeople's Choiceが決定される。

5.2. インドネシアデザインの分析結果について

インドネシアデザインの分析結果を表4に示す。

分析対象となった26の受賞デザインの内21のデザイン(81%)が『手仕事による生産』で、5の受賞デザイン(19%)が『機械による生産』であった。

『手仕事による生産』の中で76%の受賞デザインは、籐や竹、ローズウッド(黒檀)、オウギヤシ、キノコ等の植物や革等の動物から採取される原材料から作られた『形を有する材料』を使用していた。上記の植物由来の自然素材は、インドネシアに豊富に自生している再生可能な資源である。続いて24%の受賞デザインは、廃棄スケートボードやベビー用品のリサイクル等『成形された材料』を使用していた。これらの材料は、インドネシア国内で生産されたり、国外から輸入されたりし、使用後にリサイクル収集される人工素材である。一方、『機械による生産』の中で40%の受賞デザインは、金属等『成形される材料』を使用していた。そして60%の受賞デザインは、複合された材料を使い工場で大規模生産された自動車部品や医療用品等の工業製品であった。

受賞デザインから見えるインドネシアデザインの特徴を二つ挙げる。一つ目の特徴としてインドネシア国内に豊富に自生する籐やバンブー等、多種多様な自然資源を活用し、自然素材を手工芸的な生産方法と組み合わせて家具や生活用品、ファッション製品等、生活に必要な工業製品を労働集約・手工芸的に生産している点である。これは、タイにも同様に見られる特徴である。かつて籐の輸出はインドネシアにおいて一大産業であったが、籐の材料輸出規制や需要の減少に伴い、籐の生産者や生産量の減少、伝統工芸の衰退が起こっているが、新しい製品開発による籐の活用は、生産者・籐職人の収入向上や伝統工芸文化の保全につながる。またインドネシアでは、バンブーはどこにでもある素材のため『貧者の木材』と呼ばれ、劣悪な資材とみなされてこなかったが、バンブーを活用し、自転車等、現代のライフスタイルに合った製品開発によって、人々のバンブーに対する認識にも変化を起こしている。二つ目の特徴として、主に小規模事業者が主体となって製品を生産している点である。地域に根付いた小規模事業者が主体となることで、労働集約型の製品生産となり雇用の創出だけでなく、地域ごとの伝統文化や自然環境の保全に配慮した製品となる。これもタイと同様、インドネシアにも見られる特徴である。

表4：インドネシアデザイン分析の結果

	原材料	形を有する材料	成形される材料	成形された材料	複合された材料
手仕事による生産	<ul style="list-style-type: none"> • Husk (もみ殻をリサイクルした入れ物) • Vento brick (素焼きのブロック建材) 	<ul style="list-style-type: none"> • Natha (多目的バンブーバスケット) • CITRA (多目的バンブーバスケット) • Palamylea Watch(キノコの菌糸から合成して作った人造皮革とローズウッドで作った時計) • Buloo (竹皮のストロー) • Reka chair (籐の椅子) • Blok Kayu Modular (木のモジュラーブロック) • Lapik (自然素材を編んだラグ) • Concrete watch (コンクリートの腕時計) • Sope Flatpack Set (オウギヤシの葉を編んだ折畳式の入れ物) • Daru (革のバック) • Tortue Lounge Chair (籐の椅子) • Blooming Throne (自然素材の椅子) • Tosan Lounge Chair (籐の椅子) • Ombak Handwoven Wallcovering (自然素材を手で編んだ壁装材) • Spedagi Bamboo bike (バンブーの自転車) • Lukis armchairs (籐のアームチェア) 		<ul style="list-style-type: none"> • Tas Pesta (船やベビー用品に使われていた素材をリユースして作ったパーティーバッグ) • K a c a m a t a Skateboard (廃棄スケートボードをリサイクルしたサングラス) • G a w a T o o l s Gantungan Kunci (キッチンツール) • OJKIT (防水折りたたみジャケット) • Bamboo batik stole (竹繊維からできたストール) 	
機械による生産			<ul style="list-style-type: none"> • Suspension Active Stabilizator (自動車部品) • Riool (下水道用の側溝カバー) 		<ul style="list-style-type: none"> • Mobility(モーター) • Gateform C02 (医療機器) • Andalas bed (医療用ベッド)

6. タイとインドネシアデザインから見るモノづくりの特徴について

タイやインドネシアデザインから見るモノづくりの共通した特徴として、デザイナーや小規模事業者が、環境保全やサーキュラーエコノミーを意識しながら、自分たちが本拠にする地域の再生可能な自然資源や農業の生産工程で生まれる農産物残渣をリサイクルした素材を、手工芸的な生産方法と組み合わせて家具や生活用品、ファッション製品等の工業製品を労働集約的に作ることが挙げられる。このようなモノづくりは、必然的に地域の環境収容力内での生産となり、自然環境への負荷が小さくなるだけでなく、手工芸や伝統文化の活性化による新しい文化的価値の創造、地域雇用の創出、分散型で地域のニーズや課題に応えたモノづくり、地域内サプライチェーンの強化等につながり、地域の自立性を高めることが可能である。

機械による製品生産は、主に商品と貨幣を交換する交換価値創造を目的として、市場経済メカニズムに組み込まれたモノづくりであり、決められたモノしか生産できない。一方、人の手による手工芸的生産は、交換価値だけでなく、状況に応じて地域にある資源に有用性を見出し、生きるために必要な使用価値もブリコラージュ的に創造することができ『生きのびるためのモノづくり』として、かつての日本でも行われていた。また機械による製品生産では、生産の主体は製造機械にあり、人による『労働』は分業化されているが、人の手による手工芸的な生産では、生産の主体は人にあり、自らの『仕事』とその目的や産物を状況に応じて全体をコントロールすることができる。そのためパンデミックや金融危機、自然災害等によって資本主義経済システムがうまく機能しなくなり生存基盤が脅かされる時『生きのびるためのモノづくり』文化が地域内にあれば、人は生産者からアルビン・トフラー（トフラー、1980）の言う生産消費者（プロシューマー）に変身し、交換価値創造から使用価値創造に切り替え、地域の資源を使って人間の基本的ニーズを充足するのに必要なモノを自分のため、家族のため、地域のために作ることができ、地域のレジリエンスを高めることが可能である。

このようなことから、タイやインドネシアにおけるモノづくりの特徴を表すならば『生存基盤確保型モノづくり』と言えるのではないだろうか。こ

れは大企業が、利益を最大化するために、環境効率や生産効率を向上させ、グローバルサプライチェーンを通じて製品を資本集約的に大量生産する『効率性追求型モノづくり』と一線を画すものである。『生産』することよりも『生存』することを担保している生存基盤確保型モノづくりこそが、タイやインドネシアにおけるモノづくりの特徴といえる。しかし特にタイにおいては近年、高齢化による労働力不足や経済発展による賃金の高騰を受け、問題解決に向け医療を始め、製品開発、ロボット等、労働集約型産業から資本集約型・知識集約型の新しい産業分野へ転換しようとする政府の政策もあり、今後、生存基盤確保型モノづくり文化も質的に変化していくことが予想され、今後も注視していきたいと思う。

特別研修では、タイやインドネシアのデザイナーたちが活動している実際の現場を訪れ、デザイナー達はどのようにモノづくりを行い、どのような経済的、社会的、環境的变化を地域に生み出し、どのような社会文化を創造しようとしているのか。外的な側面だけでなく、デザイナーたちの思想や信仰、価値観、動機等、デザイン活動を突き動かす内的な側面も含め総合的に研究し、効率性追求型アプローチではない、生存基盤確保型アプローチによるモノづくりが、どのように地域社会の持続可能な発展やSDGs⁹のエンジンとして役割を果たしているのか、調査したいと思う。また、2021年8月現在、タイやインドネシアでは、再び新型コロナ感染が拡大し、危機的な状況に直面しているが、このような状況においてデザイナーたちはどのように危機に対処しているかも合わせて見てきたいと思う。

謝辞

本稿の執筆にあたりPhai Wichawan氏からタイ語の翻訳を、Lavinia Elysia氏からインドネシア語の翻訳等、多大なる支援を受けた。記して感謝いたします。

参考文献

木村護 at.al.「材料分類における要因の検討」1991年『デザイン学研究』No. 83, pp.83-90
トフラー・アルビン『第三の波』日本放送出版協会、1980年
サステナブルデザイン国際会議『第7回サステナブルデザイン国際会議報告書』<http://sustainabledesign.jp/category/report/>（閲覧日：2021年5月4日）

JETRO『商業省、デザイン製品による輸出拡大に期待』<https://www.jetro.go.jp/biznews/2020/10/3b4568c9f4a02be6.html> (閲覧日：2021年3月30日)

Ministry of Trade『Pemenang Good Design Indonesia 2019 Siap Bersaing pada Ajang G-Mark di Jepang Jakarta』<https://www.kemendag.go.id/storage/files/2019/06/26/pemenang-good-design-indonesia-2019-siap-bersaing-pada-ajang-g-mark-di-jepang-id0-1561539307.pdf> (閲覧日：2021年7月12日)

注

- 1 2008年にはタイ政府(タイ王国商務省輸出振興局)が「Design Excellence Award (DE mark)」を設立。2012年にはインド政府が「India Design Mark (I Mark)」を設立。2014年にはシンガポール政府が「Singapore Good Design Mark (SG Mark)」を設立。2017年にはトルコ政府(経済省)とトルコ輸出業者協会が共同主催のデザイン賞「Design Turkey」を設立。2018年にはインドネシア政府(商業省)が「Good Design Indonesia」を設立。
- 2 2017年から東京造形大学では、筆者と本田圭吾氏(桑沢デザイン研究所専任講師)を中心として、シンギー・スシロ・カルトノ氏及び一般社団法人Spedagi Japanと連携したスベダギ・バンブーバイク・プロジェクトというプロジェクト授業を展開しており、2018年にはグッドライフアワードの環境アート&デザイン賞(環境省)、2019年にはキッズデザイン賞(経済産業省)を受賞。
- 3 サステナブルデザイン国際会議は、サステナビリティのためのデザイン活動において日本をリードする益田文和(元東京造形大学造形学部サステナブルプロジェクト専攻教授)を中心に2006年から2016年までの10年間、毎年開催された国際会議。筆者は、2010年から実行委員会委員として携わった。2017年からは、インドネシア人デザイナーのシンギー・スシロ・カルトノが中心となりInternational Conference on Village Revitalization (ICVR)という会議に引き継がれ現在に至る。各回の会議報告書は以下のURLからダウンロードができる。サステナブルデザイン国際会議報告書のURL: <http://sustainabledesign.jp/category/report/>
- 4 グローバルサウスの人間や自然を犠牲にして支えられ成り立つ生活。その犠牲はグローバルノースには見えなくされてきたが、昨今の気候変動や紛争、テロリズムなど、グローバルノースにも跳ね返り、隠し続けることが難しくなっている。
- 5 Design Excellence Awardのウェブサイト: <https://demarkaward.net/en/>
- 6 グッドデザインアセアンセレクションは日本アセアンセンターとJDPとの、2017年から2018年の2年間にわたる共同プロジェクト: <https://www.g-mark.org/activity/2018/asean.html>
- 7 2012年に商務省輸出振興局(DEP)は国際貿易振興局(Department of International Trade Promotion / DITP)に変更された。
- 8 2018年度まで応募カテゴリーは(1)モビリティ(2)家具・リビング用品(3)家電製品(4)エレクトロニクス製品(5)アクセサリ・ライフスタイル製品(6)グラフィック・パッケージの6カテゴリーであったが、2019年度から応募カテゴリーは20に拡大されて現在に至る。
- 9 2015年9月にニューヨークの国連本部で開催された国連サミットで、政治的なイデオロギーや先進国・途上国の力の差を越えて、国連加盟国193カ国が、賛同し、2030年までの達成を目指した国際社会の共通の目標として設定された持続可能な発展目標のこと。17の目標と具体的に取り組むべき課題を示した169個のターゲットと、何をもって達成したかを測る232の指標が設定されている。